



大阪商業大学 FD ニュースレター

第21号

2020年11月発行

増刊号

2020年度前期授業におけるオンライン対応 — 苦心・工夫と発見 —

C O N T E N T S

はじめに	1
杉田 陽出 (経済学部 経済学科 准教授)	
2020年度前期のオンライン運営の振り返り	2
柴田 孝 (経済学部 経済学科 准教授)	
一般講義科目のオンライン授業におけるグループワーク導入の試み	3
西嶋 淳 (経済学部 経済学科 教授)	
「英語ⅠA」におけるオンライン授業の取り組み	8
吹原 顕子 (総合経営学部 商学科 准教授)	
解説動画配信を活用したオンライン授業の実施	15
高橋 美貴 (総合経営学部 経営学科 教授)	
フィールドワークゼミナールにおけるオンライン授業の取り組み事例	20
宍戸 邦章 (公共学部 公共学科 教授)	
OBPゼミナールⅢ・ⅣにおけるWeb会議システム導入の試み	24
林 幸治 (総合経営学部 経営学科 教授)	
結びにかえて	26
加藤 司 (総合経営学部 商学科 教授)	
編集後記	30
杉田 陽出 (経済学部 経済学科 准教授)	

はじめに

杉田 陽出

(経済学部 経済学科 准教授)

世界規模での新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) 拡大の影響を受け、本学においても 2020 年度前期の授業は全てオンライン化されることになった。パソコンやスマートフォンを使った遠隔授業では、教室での対面授業とは異なり、学生の顔や声を直接見たり聞いたりすることなく授業を運営しなければならない。また、コロナ禍の中、学生だけでなく教員の行動範囲にも制限がかかり、これまであたりまえに行えていたことが行えなくなるなど、教育環境という点で様々な変化が生じた。このような状況下で、教員はこれまでの授業運営のあり方を見直し、場合によっては授業運営に対する自身の視点を多様に変えながら、新たな教授法を生み出す必要に迫られた。

COVID-19 の拡大により全面的にオンライン化されるという異例の状況下で、各教員が実践した授業運営上の苦心や工夫、そしてその成果として得られた知見は、その教員だけの経験や知見とするのではもったいない。それを公開し他の教員と共有することで、今後の教育活動に向けて、よりよい授業運営のあり方を検討するのに有用な学びの場を提供することができるのではないか。このような視座から、今回、FD 委員会では、その公開方法として FD ニュースレター上での報告という手法を取ることにし、増刊号を発刊することになった。

このようなわけで、この増刊号は、2020 年度前期に開講された一般講義科目、語学科目、情報科目、演習科目、OBP・GET 科目から 1 名ずつ選ばれた担当教員が、前期の授業運営方法やその成果についてまとめたものを特集した号となっている。執筆教員、今回取り上げた担当科目、その開講日時については下の表のとおりである (本誌掲載順)。

教員	科目	開講日時
柴田 孝 (経済学部 経済学科 准教授)	国際経済学 I	火曜 3 限
西嶋 淳 (経済学部 経済学科 教授)	土地利用制度	木曜 3 限
吹原 顕子 (総合経営学部 商学科 准教授)	英語 I A	月曜 1・3 限 水曜 1・3 限
高橋 美貴 (総合経営学部 経営学科 教授)	デジタルメディア I コンピュータシステム I マルチメディア情報表現 I	火曜 2 限 木曜 4 限 木曜 5 限
宍戸 邦章 (公共学部 公共学科 教授)	フィールドワークゼミナール II・III・IV	木曜 2・3・4 限
林 幸治 (総合経営学部 経営学科 教授)	OBP ゼミナール III・IV	木曜 3・4 限

いずれの授業においても、その科目の学修目的に合わせて、各教員が工夫を凝らしながら運営を行った様子が窺える。また、その結果として、成功した点だけでなく、反省点や問題点、さらに改善点についても言及されている。これからの新たな授業運営方法を考えていくうえで、本学の教員の方々にぜひ参考にさせていただきたい。

2020 年度前期のオンライン運営の振り返り

柴田 孝

(経済学部 経済学科 准教授)

1. はじめに

授業支援システム、マナバコースが導入済みであったことで、2020 年度前期オンライン授業の運用が大いに助けられたと実感している。そのうえで、各機能の活用方法についての知見が自分の中で十分ではなく、もう少しうまくできたのではないかとの思いもあることから、平常時から意識的に新しいツールを用いるようにして、習熟度を高めておくことの重要性を強く感じた。以下、前期の経験を通じて感じたことを述べる。

2. オンライン授業での収穫

前期のオンライン授業においては、履修者がマナバを通じて、自分で資料を確認し課題に取り組むこととなった。このことは、積極的に取り組む学生にとっては、自分のペースで繰り返し確認しながら学習できるというメリットとなったように思う。一方で、コンテンツの閲覧状況を確認したところ、ほとんど閲覧していない学生がいたことを確認している。ただし、こうした行動の理由として、履修登録時の期待と違っていたために学習継続を断念した可能性もあることから、オンライン授業としての課題というよりは、シラバスの記述を工夫し、科目の内容が履修希望者に明確に伝わるよう改善していくという私の課題であると考えます。

マナバコースを活用したことで効果を発揮したと思えることは、小テストに設けた質問欄を通じて、毎回、各科目で数件の質問があった点である。平常時と比べるとその数は増加しており、質問しやすい環境につながっていたのかと思う。また、語句等の確認のための質問や配布資料のコンパクト化などの講義資料の形態についての要望などが大半であったが、ときには具体的な事象についての質問もあり、担当者として刺激を受けることがあった点は良かった。

1つ、「国際経済学 I」で得た収穫を紹介する。「国際経済学 I」では、国際貿易を主たるテーマとして講義を行っている。例年はアイスブレイキングとして、各回の講義で貿易統計のデータを用いて具体的な品目について世界との貿易を紹介してきた。前期のオンライン講義では、毎回、マナバコースの小テストで次回に紹介する 2 品目をあげ、どちらの貿易額が大きな金額であるかアンケートをとった。そのうえで次回の講義資料の冒頭でデータを紹介し、世界との貿易を説明するようにしていた。履修生の中に、毎回、予想の根拠をコメントしてくれる学生がおり、意外と好意的に捉えてくれている人もいることが確認でき、思わぬ形で履修生とのコミュニケーションがとれるという収穫があった。

3. 講義科目でのマナバコースの使用方法

指針に従い、講義資料 (PDF 化したスライド資料) の事前配布、質問受付と回答、理解度確認小テスト提示と定期試験実施をマナバコース上で行った。

講義資料は講義日の午前 0 時から配信開始とし、定期試験終了時まで公開する設定にした。理解度確認のための小テストは講義開始時間に公開し、講義時間 + 48 時間を回答期間とした。小テスト中に質問欄を設けており、そこで出た質問は次回講義時間までに個別にマナバコース上で回答した。

講義資料については、数年前から説明のためのスライド資料作成を進めていたことが、結果的にオン

ライン授業への移行の助けとなった。スライド資料作成にあたっては、教室後方からの視認性確保のため、文字のポイント数を極力 20 ポイント以上とするようにしていた。これを PDF 化したところ、スマートフォンの画面サイズでも特にストレスを感じることなく閲覧できたのではないかと考えている。

4. 使用した小テスト機能についての考察

主に自動採点小テスト機能を用いて、各回の講義資料に基づく確認問題を数問課した。自動採点小テストとすることで、指定期日に自動的に採点され、履修者が正誤を確認できる。また、解説を付与しておくことで、間違いやすい点や注意してほしい点についても、マナバ小テスト回答期間終了後に自分で確認できる。

しかし、どれだけの履修者が事後に確認してくれていたのかは現時点ではわからない。初回講義資料で解説の確認方法を説明していたが、あまり認知されていなかったのではないかと感じている。講義の運営が対面でなくオンラインであったことを考えれば、小テストの結果と解説の確認方法の説明を複数回すべきであった。

また、自動採点小テスト固有の問題として、単語記入型の場合は、回答の揺らぎを想定して、複数のパターンを許容するようにするか、あるいは事後的に評価を修正する必要がある。

選択式の場合は、設問の作り方に工夫が必要である。択一式の場合は、適切な誤答となる選択肢を用意することに苦勞することがある。それを回避するために、例えば複数選択式にすることや、マッチング問題を用いることが考えられる。前期はマッチング問題の形式に対して私の習熟度が不足していたため、複数選択式のみ活用した。しかし、問題の出題形式にバリエーションをもたせることで、回答前に学生に考えさせる時間を作ることに繋がると考えているため、後期以降に活用していきたい。

他に、自由記入型を用いて各回の学びについて記述することを求めることで、自動採点はできなくなるが、言語化することで学びの振り返りにつなげることが期待できる。

一方で、毎回小テストを実施したが、定期試験の回答を見る限りでは、例年と比べて特に理解度が高まったと思えないことは残念だった。こまめに理解度を確認する機会を設けていたことから、定期試験での正答率が高まることを期待していた。しかしそうならなかったということは、私の説明や小テストの出題のしかたが十分でなかったということである。単に小テストを課すだけでなく、問いかけのしかたを工夫することや複数回の内容をまとめた理解度確認の機会を設けるなど、小テストの構成を見直していく必要があると考えている。



一般講義科目のオンライン授業におけるグループワーク導入の試み

西嶋 淳

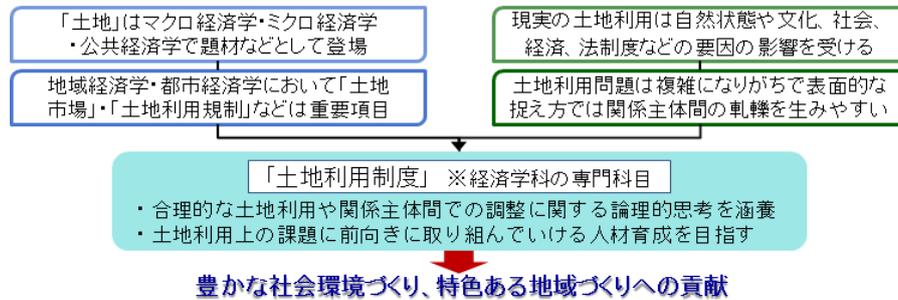
(経済学部 経済学科 教授)

今年度前期授業の全面的なオンライン化に際し、担当する一般講義科目のうち「土地利用制度」(受講者数 235 名)では、その設置の趣旨や教育目的を熟慮し学修目標を達成できるように、manaba の「プロジェクト」機能を利用して意見交換を主眼とするグループワークの導入を試みました。

本稿では、その背景や経緯と実施状況の概要および前期定期試験の結果を踏まえた課題などについて紹介します。

1. この科目におけるグループワーク導入の趣旨

「土地利用制度」は、2014（平成26）年度に実施された主専攻科目にかかる履修モデルコース導入・カリキュラム改定の際に、経済学部経済学科において新設された専門科目です。その位置づけや、従来型の対面授業でのグループワーク導入の趣旨などについては、2019年3月発刊の「大阪商業大学FDニューズレター」第19号（pp.4-5参照）で紹介済みですので、本稿では割愛します（図1参照）。今年度もオンライン化以前に公開していたシラバスでは、ものごとを多面的・客観的に捉える思考方法を身につけるための手段の1つとして、グループワーク・発表を位置づけていました。



（出典：西嶋淳(2019)「大阪商業大学FDニューズレター」第19号, p.4.）

図1 経済学科のカリキュラムにおける「土地利用制度」の位置づけ

2. 今回のグループワーク導入の経緯

授業の全面的なオンライン化に際しては、科目の位置づけや教育目的を表現したシラバスにおける「科目の概要」「授業の到達目標」「成績評価基準」欄については原則として変更しない方針でしたが、「授業計画」の部分的な順序や授業運営面では見直しの余地がありました。受講者がスマートフォン上でmanabaを利用するオンライン授業環境を前提としているため、教材（解説資料）の提供もmanabaの画面上およびPDF形式のファイル添付が原則であることから、正直、グループワーク実施を断念しようかと悩みました。

一方で、教室での受講者との対面コミュニケーションがとれない中で、文字・文章でのコミュニケーションを図るうえでは、誤解が生じないようにという観点から、伝えるべき内容を詳細に正確に表現する必要もあります。この科目のガイダンスと位置づけられる第1回授業の解説資料の作成過程において、その教育目的などを明確化した結果、土地利用の「調整のあり方」について論理的思考を促すことを掲げる以上、事例検討とこれに関する受講者間での意見交換は重要な意味をもつと再認識しました。

manabaの「プロジェクト」機能に関するマニュアルを読み返し、練習用「コース」でその機能を確認した結果、グループワークの役割を限定すれば本学が採用するオンライン授業環境下でも導入可能と判断し、オンライン授業化に伴う見直し後の「授業計画」と授業運営方針にグループワークを組み込みました。

3. 初回のグループワーク前後の授業運営計画について

今年度前期授業は、学年歴上の第1週～第3週の授業が全面的に休講扱いとなったことから、その対応として前期授業期間中に3回分の補講を実施することになりました。この科目では、補講と位置づける回の授業を第7回（第6回と同じ週に実施）、第11回（第10回と同じ週に実施）、第13回（第12回と同じ週に実施）に設定し、この3回分の授業をグループワークによる事例検討に充てることにしました。

このうち、第7回授業のグループワークについては、担当教員にとっても受講者にとってもまさにト

ライアルであり、その時点で思いつく限りの準備には努めるものの、多くを期待せず、可能性と限界を見極めるためのものと割り切ることにしました（図2参照）。

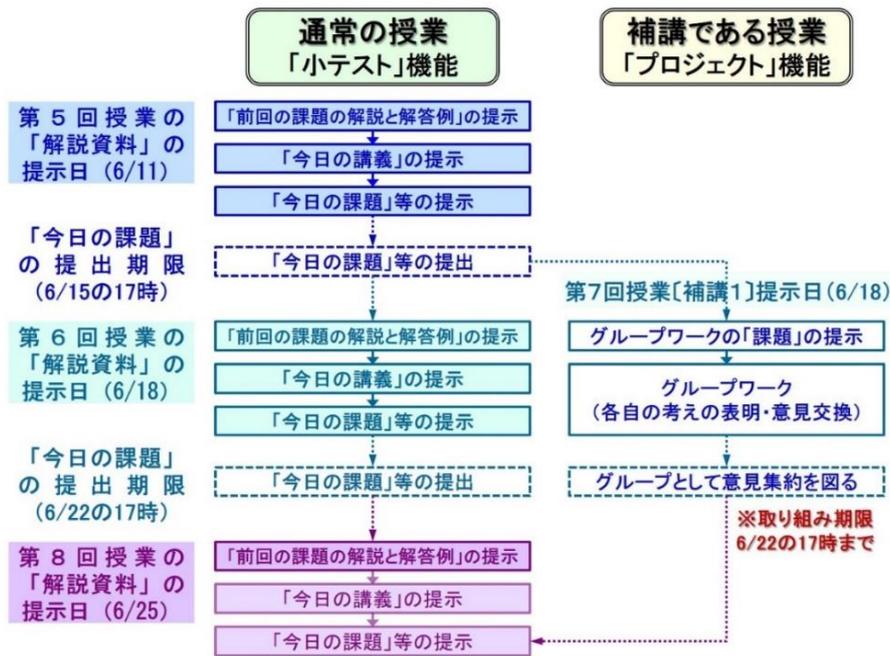


図2 第5回授業の解説資料で提示した第7回授業のグループワークの位置づけ等について

事前の準備としては、初回のグループワークを実施する第7回授業の前週にあたる第5回授業の解説資料において、関連する授業（第5回の課題から第8回の課題まで）の関係性とmanaba（スマートフォン版）の画面における「プロジェクト」機能の操作手順のイメージを図示し、趣旨と注意事項も明記しました。

4. 初回のグループワークの進め方と注意事項について

受講者が使用するmanabaの「プロジェクト」機能については、所属チームのスレッド上での「コメント」投稿に限定し、いわゆるビジネスチャットのような使い方で課題に対する自身の考え・意見の表明を求めることにしました。このグループワークでの課題は、「大阪市・心斎橋筋景観協定区域における土地利用規制についてどのように考えますか？ 所属チームのメンバー間での意見交換を通じて、所属チームとしての見解が見いだせるように、相互に協力しながら意見集約を図ってください」と設定しました。ただし、使用する機能を限定したことから、受講者には「チームメンバーが積極的に協力し合いながら意見集約を図る取り組みが行われることを期待していますが、このグループワーク内で成果を求めるものではありません」と、その位置づけを第5回授業の解説資料に明記しました。

グループ（チーム）編成に関しては、シラバスの「受講上の注意点」欄において「受講者は、いずれかのグループ（チーム）に所属してもらいますが、グループ編成は担当教員が行いますので承知しておいてください」と明記していました。初回のグループワークについては、グループ編成作業時期までの課題への取り組み状況を参照しながら、所属学科や学年も偏らないように配慮しつつ、メンバー数が7～9名となるように、全受講者をいずれかのグループに配置しました。

なお、注意事項としては、所属チームのスレッドに不適切な「コメント」が投稿される可能性もあることから、次の事項を明記しました。

- このグループワークでは、担当教員は受講者（チームメンバー）の本学学生としての倫理観と自主性を信頼し尊重しますが、その「コメント」において他者（個人、組織・団体を問わない）に対して配慮を欠く表現を用いた場合や、このグループワークの課題と関係のない内容を「コメント」として表明した場合には、担当教員は「コメント」機能を利用して当該受講者（チームメンバー）に対して注意を促します。
- 担当教員が「コメント」機能を利用して注意を促しているにもかかわらず、その後も「コメント」において配慮を欠く表現を続ける場合や、「コメント」の内容が誹謗中傷に類するものである場合には、担当教員はその内容を記録して、大阪商業大学学則および関係規程・規則等に基づいて厳正に対処しますので、承知しておいて下さい。

5. 初回のグループワークの反省とその後のグループワークに向けての検討

初回のグループワークでは、受講者の「コメント」投稿を促す趣旨で、同じ週に実施した第6回授業の課題（採点対象）を所属チームのスレッドでの「コメント」投稿報告としたことから、参加状況（1回以上の「コメント」投稿）は約65%でした。ただし、このような形態のグループワークは大半の受講者が初体験ということもあって、グループワーク期間最終日まで様子見のメンバーが多く、実態は駆け込み投稿が大半で、意見交換の場として機能しているとは言い難い状況でした。

一方で、第6回授業の解説資料に設けた質問欄（グループワーク以外の授業の解説資料はすべてmanabaの「小テスト」機能を用いて1つの「小テスト」として作成・配信）には、一部の積極的に取り組んでいた受講者から不満の「声」が寄せられました。これらの受講者とは、「小テスト」画面の「コメント」機能を用いて何度か意見交換を行った結果、意思疎通が図られるとともに、いくつかの貴重なアイデアを得ることができました。

また、一部の受講者からは、シラバスに明記しているにもかかわらず、グループワーク自体に否定的な声が寄せられました。このような反応に関しては、昨年度までの対面授業においても、担当教員の指示に従わず、グループワークに参加しない受講者や、グループメンバーとして名を連ねるものの非協力的な受講者も散見されたことから、ある程度は予想していました。しかし、メンバーを明示する必要がある所属チームのスレッドを用いた「コメント」投稿によるグループワークでは、否定的・非協力的な受講者の存在は対面環境よりも軋轢をもたらす危険性が高いと感じたため、2・3回目のグループワークに向けては工夫が必要と考えました。

検討の結果、第8回授業の解説資料の末尾において、次のような通知を行って2・3回目のグループワークへの取り組み方について受講者に選択肢を用意するとともに、初回のグループワークでの取り組み状況が類似する受講者をまとめるように、グループ編成を見直すことにしました。

このグループワークは、第7回授業〔補講1〕と同様に、オンラインによる授業運営の下で、この科目の受講者が、同じ課題に対する他の受講者の「考え・意見」を知る機会を設ける趣旨で企画しているものです。

ただし、このグループワークでは、「京都における景観問題」を題材としますので、より多面的、客観的で詳細な検討が必要になると思います。

このグループワークでの経験は、設例に対する自身の考えを論述する問題を予定している前期定期試験を含め、この科目の受講に関して意義のあるものになるであろうとの認識に基づいて企画していますが、受講者には相応の負担を課すことになると思われます。

以上により、同じ課題に対する他の受講者の考えや意見を知る機会を失うこと、グループワークでの貢献に対して加点を得る機会を失うことを「承諾」される受講者に限り、「単独で第11回授業〔補講2〕と第13回授業〔補講3〕を受講する」ことを認めます。

この場合の「単独で第11回授業〔補講2〕・第13回授業〔補講3〕を受講する」とは、当該受講者だけが所属するチーム（およびチームスレッド）を設けることを意味します。

同じ課題に対する他の受講者の考えや意見を知る機会を失うこと、グループワークでの貢献に対して加点を得る機会を失うことを「承諾」し、「単独で第11回授業〔補講2〕と第13回授業〔補講3〕を受講する」ことを希望する受講者は、その旨を次の枠内に明記して下さい。

6. 2・3回目のグループワークの進め方と結果について

初回グループワークの反省をもとに見直した事項を反映させた、2・3回目のグループワークの進め方は図3のとおりです。見直しの要点は、検討内容の複雑化に合わせて各回の期間を2日延長したこと、同じ週に実施する通常の授業の講義内容との連携を深めたこと、希望者には自身だけが所属するチームを認めたことから、所属チームのスレッドでの「コメント」投稿報告を求めないようにしたことなどです。

その結果、グループワークへの取り組み姿勢の違いが顕著になりました。受講者もmanabaの「プロジェクト」機能の使い方や所属チームのスレッド上での「コメント」投稿に慣れてきたようで、いくつかのチームでは多方面からの冷静な視点による本質を突く意見の交換が見られた反面、参加状況（1回以上の「コメント」投稿）は50%弱に低下してしまいました。



図3 第9回授業の解説資料で提示した第11回・13回授業のグループワークの手順等について

7. オンライン授業でのグループワーク導入の効果について

前述のとおり、今回のグループワークでは、その役割を所属チームのスレッド上での「コメント」投稿による課題に対する受講者間での意見交換の場限定し、グループとしての成果を求めるものとはしませんでした。そのため、グループワークに取り組んだことによる成果は、学習成果全般について目標達成度を評価するために実施する前期定期試験において確認することにしました。

この科目における前期定期試験の成績評価割合は50%に設定していますが、以前より論述式問題のみを出題し、主要な設問は正解を設定しない設例に対する所見を求めるものとしていました。今年度の前期定期試験は、約7日の解答作成期間を設定してオンラインで実施することが本学の統一方針でしたので、この科目についてはmanabaの「小テスト」機能を用いて画面上で入力させる方式を選択しました。

ただし、このような方式の場合、他の受講者の解答を単純に模倣する者の出現も予想されました。そのため、1つの設例に基づき、自身の基本的な考え方の論述を求める問い、その考え方に対して想定される反対意見をあげてその問題点について論述を求める問い、多様な考え方が併存することを与件として重要と考えられる機能等について論述を求める問いを設けました。そのうえで、自身の基本的な考え方

の論述を求める問いでは、条件として、授業における課題への解答やコメントの投稿を通して表明済みの自身の考えや意見をできるだけ多く引用することを求めました（複数引用していない場合は減点対象）。加えて、注意事項として、答案に他者の著作物を引用・転載した場合には、必ず引用・転載している旨と引用・転載元を特定して表記すること、盗用・剽窃の事実が判明した場合には厳正に対処する旨を明記しました。

このように、前期定期試験での要求水準を厳しくしているにもかかわらず、成績評価が「A+」または「A」となった実数は受講者が多かった昨年度とほぼ同じで、その構成割合は4%程度増加しましたので、一定の効果はあったように認識しています。また、オンライン授業において他の受講者の考えを知る機会を設けたことへの賛意表明がわずかですがあったこと、所属チームのスレッド上の「コメント」や前期定期試験の解答の中で、他のメンバーの意見が参考になったことなどを表明する受講者も散見されたことから、それなりの意義はあったように感じています。

8. オンライン授業でのグループワークの課題について

今年度前期のような異例の条件のもとでの授業のオンライン対応では、manabaの複数の機能を使い分ける必要のあるグループワークを導入した授業運営は、受講者にとって煩雑であったことは否めないと認識しています。また、本来、グループワークにおけるファシリテーションでは、受講者間での意見交換へのファシリテーターの関与は最小限度にとどめるべきと考えますが、オンライン対応では文字・文章として残る形での関与となってしまうため、結果的に受講者を誘導している可能性を否定できません。

対面コミュニケーションがとれない中では、受講者に対してインセンティブを付与してもグループワークへの関心を高めていくことは難しい一方で、もともと課題への関心が高く視野を広げることを意識する受講者層では、オンライン化は集中力を高めることに寄与しているようにも思います。そのため、オンラインのみの授業運営のもとでのグループワーク導入は、受講者間の学習状況の格差を広げる可能性があることを最後に指摘しておきたいと思います。



「英語 I A」におけるオンライン授業の取り組み

吹原 顕子

(総合経営学部 商学科 准教授)

スマートフォンの使用を前提として授業支援システム「manaba course」を利用したオンデマンド型授業をすることになり、それまで対面授業で行ったことの「何ができる」「何ができないのか」「新たにできることは何か」を考え、試行錯誤の中で前期授業を計画しました。オンライン授業において受講生にどのようにして音読をさせるかということが最も大きな課題でした。

1. スケジュールの周知

学生が見通しを持って学修に臨めるよう、初回の授業で15回の授業スケジュールを示しました（図1参照）。

2. 授業の実施

コースニュースで授業内容を示し、manaba courseのどの機能を使うかを指示しました（図2参照）。

回	日	Unit	課題 ①	課題 ②	提出期限
1	5/11	オリエンテーション	☞ アンケート 英語学習に関するアンケート	☞ 掲示板 「社会で活躍する人の英語学習」を読んで	5/17
2	5/18	Unit 1	☞ コンテンツ→小テスト あらすじ並べ替え →解答	☞ コンテンツ→レポート あらすじ①～④音読練習 →録音・提出	5/24
3	5/25	The Big TV	☞ コンテンツ→レポート あらすじ⑤～⑨音読練習 →録音・提出	☞ コンテンツ→小テスト リスニング(問題と音声) →解答	5/31
4	5/25	【補講】 Unit 1 pp.4-5	☞ コンテンツ→小テスト 問題→解答		5/31

図1 15回の授業スケジュール(一部)

<p>第2回は、下の①～④を行います。</p> <p>① Unit 1 あらすじ並べ替え ☞ コンテンツ(p.1) → 小テスト</p> <p>② 音読練習 ☞ コンテンツ(p.2)</p> <p>③ 録音・提出 ☞ レポート</p> <p>④ 録音・提出方法(例) ☞ 掲示板</p> <p>提出報告・録音方法の提案 ☞ 掲示板</p> <p>質問等は、(担当者のメールアドレス)にメールしてください。返信を受け取れるようにしてください。</p>
--

図2 第2回の授業内容

① あらすじ並べ替え☞ コンテンツ(p.1) → 小テスト

この授業では、『True Stories: Level 1A, Silver Edition』(Heyer, S., 2019, Pearson Education)を教科書として使用しています。この教科書は1ユニットが4ページから成り、最初のページに本文の内容を示す9枚のイラストがあります。そのイラストのキャプションになるように、本文のあらすじを9行にまとめました。教科書の英文を頭から逐語訳をしていると、英語が苦手な学生は最後まで行きつくことができません。ストーリーを理解するために最低限に必要な情報を読み取り、全体を把握することを優先しました。

manaba course のコンテンツ (p. 1) に、ユニットの最初のページに描かれているイラストを示し、その下にあらすじの英文をランダムに並べて⑨から①としてあげた PDF ファイルをアップロードしました(図3参照)。学生はイラストに何が描かれているかを観察し、下の英文を読み

Unit 1 The Big TVs

課題] あらすじ並べ替え

最初に絵をよく見て、ストーリーを想像します。それから1～9のイラストの説明に合う英文を、下の a～i から選び、()に書きましょう。すべての()が埋まったら、manaba の小テストで解答し、答え合わせをしてください。

*「まったくわからん!」という人は、次ページの解説を参考にして取り組みましょう。

イラスト1	イラスト2	イラスト3	イラスト4	イラスト5
()	()	()	()	()
イラスト6	イラスト7	イラスト8	イラスト9	
()	()	()	()	

Ⓐ Jim is at home in his living room.
 Ⓑ "My TV is broken," Jim tells the men.
 Ⓒ The men are carrying a big TV.
 Ⓓ Jim gives the men his TV.
 Ⓔ Jim asks the men, "Are you going to fix that TV?"
 Ⓕ The two men are robbers.
 Ⓖ "Hey!" he says to the two men.
 Ⓗ The men put the two TVs in the van and drive away.
 Ⓘ When Jim looks out the window, he sees two men.

図3 第2回授業課題1

ます。英文が説明している絵の下の（ ）に①から④の記号を書くという課題でした。

学修を継続させるために、最初から「できない」と思わせないことを心がけています。対面授業では登場人物や出てくる物など、絵の中の重要な情報について英語でやり取りをし、できる限り音声で理解をさせてから英文の並べ替えをします。その際はあまり文法的な説明は加えていません。

オンライン授業では学生とやり取りをして進めることができないため、解説（図4参照）を用意し、動詞（句）が文の構造を決めること、前置詞が意味のまとまりをつくることを意識させるようにしました。対面授業では白黒のハンドアウトしか使えませんが、スマートフォンではPDFファイルをカラーで見られることが利点でした。

コンテンツ（p.1）で英文の並べ替えをした後、学生はその答えを小テストで解答しました。自動採点小テストで入力必須問題のマッチングを使用して問題を作成し、「学生の提出時に採点結果と正解を公開する」としました。対面授業では実際に紙を並べて完全に一致するまでさせますが、オンライン授業では「部分一致」で採点し、合格点を6点としました。

② 音読練習 ⇨ コンテンツ（p.2）

コンテンツ（p.2）にあらすじ前半4文のリピーティングの音読練習用の音声を提示しました。主語+動詞（句）、前置詞から始まる意味のまとまり（チャンク）を意識できるように、聞いた英語を学生が繰り返すためのブランクを英文の音声中に挿入しました。英語に苦手意識を持つ学生が多いことや、機器を使うことによる学生の負担感を考慮し、1回の授業で練習する分量を少なくしました。Unit2以降は、リピーティングのための音声と、1文を通して聞くことができる音声をアップロードしました。実際に音読を録音するときは文単位であることと、それによりイントネーションや意味の区切りでポーズがあることに気づかせようとしてきました（図5参照）。

Unit 1 あらすじ並べ替え 解説

英語を読んだり聞いたりするときにはできるだけ前から順に、「て、に、を、は」を補いながら、意味をとっていきましょう。

黄色のハイライト **is** は動詞、口で囲まれている **at** は前置詞を示しています。
動詞の前の人や物が「主語(〜◎)または〜◎)」になります。**前置詞**は後に来る人や物とくっつきます。

① Jim **is** / **at** home / **in** his living room.
 ジム いる ーに 自宅 ーの中に 彼の リビングルーム
 → ジム◎ いる 自宅□ リビングルームの中に

動詞の後ろにある人や物が「目的語(〜◎)または「目的語(〜◎)になります。

② "My TV **is** broken," / Jim **tells** / the men.
 「私の テレビ いる 壊れて」 ジム 言う その 男たち
 → 「私のテレビ◎ いる 壊れて」 ジムは 言う その男たちに

③ The men **are carrying** / a big TV.
 その 男たち いる 運んで 一台の 大きい テレビ
 → その男たち◎ いる 運んで 一台の大きいテレビ◎

give(与える)は、次に「人」「物」が続いて「目的語①(〜に)」「目的語②(〜を)」になります。

④ Jim **gives** / the men / his TV.
 ジム 与える その 男たち 彼の テレビ
 → ジム◎ 与える その男たち□ 彼のテレビ◎

ここからは自分で！「て、に、を、は」を忘れずに。

⑤ Jim **asks** / men, / "Are you going to **fix** / that TV?"
 ジム 尋ねる その 男たち 「ですか あなた ーする 修理する その テレビ」

⑥ The two men **are** robbers.
 その 2人の 男たち =(イコール) 泥棒

⑦ "Hey!" he **says** / **to** the two men.
 「へい！」 彼 言う ーに その 2人の 男たち

⑧ The men **put** / the two TVs / **in** the van / **and** drive away.
 その 男たち 置く その 2台の テレビ ーの中に ヴァン(車)そして 運転する 遠くへ

緑色のハイライト **When** は **接続詞**です。後に続く文とくっついて、別の文とつなぐ働きをしています。

⑨ **When** / Jim **looks** / **out** the window,] he **sees** / two men.
 とき ジム 見る ーの外を 窓 彼 見る 2人の 男たち
 → [とき ジム◎ 見る 窓の外を□] 彼◎ 見る 2人の男たち◎

図4 第2回授業課題1（解説）

The Big TVs 音読練習

● 前半1～4の英文の音読練習をします。
 意味のわからないところを、解説(PDFあらすじ並べ替えp.2)で確認しましょう。しっかりと意味を理解してから音読の練習をします。
 最初は意味の区切りで切りながら練習しましょう。

① 文字を見ないで、聞いた音をそのまま繰り返します。すらすら言えるようになるまで練習しましょう。
 ② 音と文字を一致させながら、聞いた音を繰り返しましょう。
 ③ 音がなくても読めますか？

1. Jim **is** / **at** home / **in** his living room.
 ▶ 0:00 / 0:07

2. **When** / Jim **looks** / **out** the window,] he **sees** / two men.
 ▶ 0:00 / 0:13

3. The men **are carrying** / a big TV.
 ▶ 0:00 / 0:08

4. "Hey!" he **says** / **to** the two men.
 ▶ 0:00 / 0:04

● ①～③ができるようになったら、4つの文の音読を録音してレポートから提出してください。

図5 第2回授業課題2

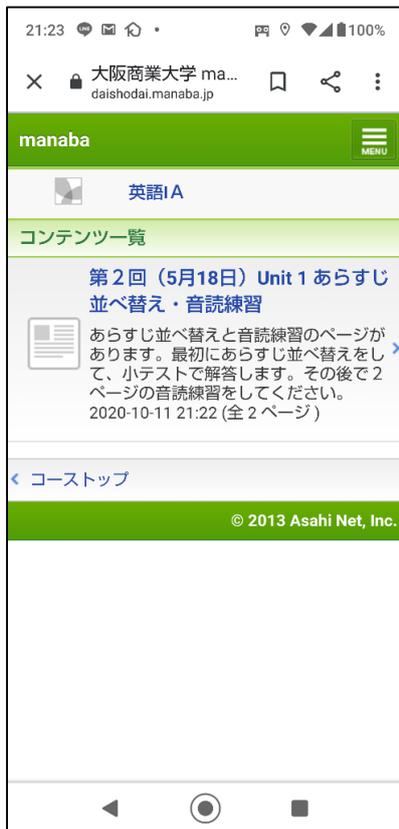
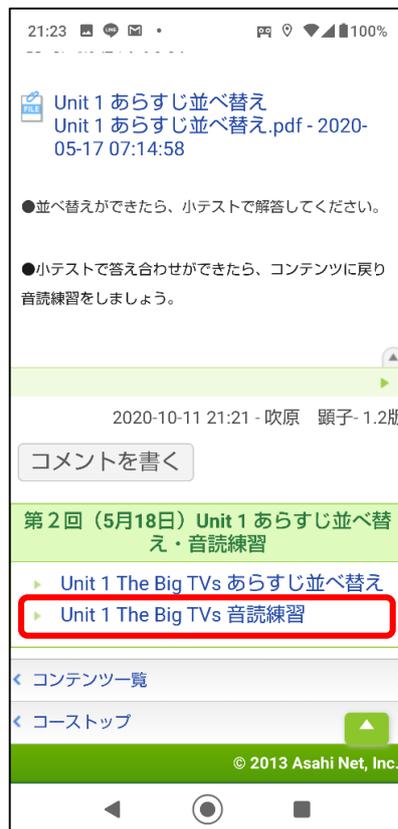


図6 【スマートフォン版】コンテンツ画面



図7 【スマートフォン版】コンテンツのトップページ



スマートフォンでコンテンツ (p. 2) を見つけることが、学生にとっては難しかったようです。学生からの質問を受け、自分でもスマートフォンの画面を見てコンピュータの画面との違いを知りました。事前にスマートフォンの画面でチェックし、学生に当該ページの見方を説明するべきでした。

学生が見る画面は図6や図7のようになります。この原稿を書くにあたり、改めて前期の第2回授業を公開し、manaba course【スマートフォン版】の画面のスクリーンショットを撮ったため、日付が実際とは異なっています。

「英語 I A」のトップページは図6のように表示されます。コンテンツ一覧の「第2回 (5月18日) Unit1 あらすじ並べ替え・音読練習」をタップすると、当該コンテンツのトップページが表示されます (図7左)。ここを見ても、コンテンツ (p. 2) は見えません。スクロールして下を見ていくと、最も下に「Unit1 The Big TVs 音読練習」(図7右の赤い枠で囲んだ部分) があります。

図8がコンピュータの画面です。コンピュータの【PC版】を見てコンテンツを作成していたため、学生が見る画面を意識せずに指示をしてしまっていました。学生は、①から②に進む段階で混乱したことが推測できます。



図8 【PC版】コンテンツのトップページ

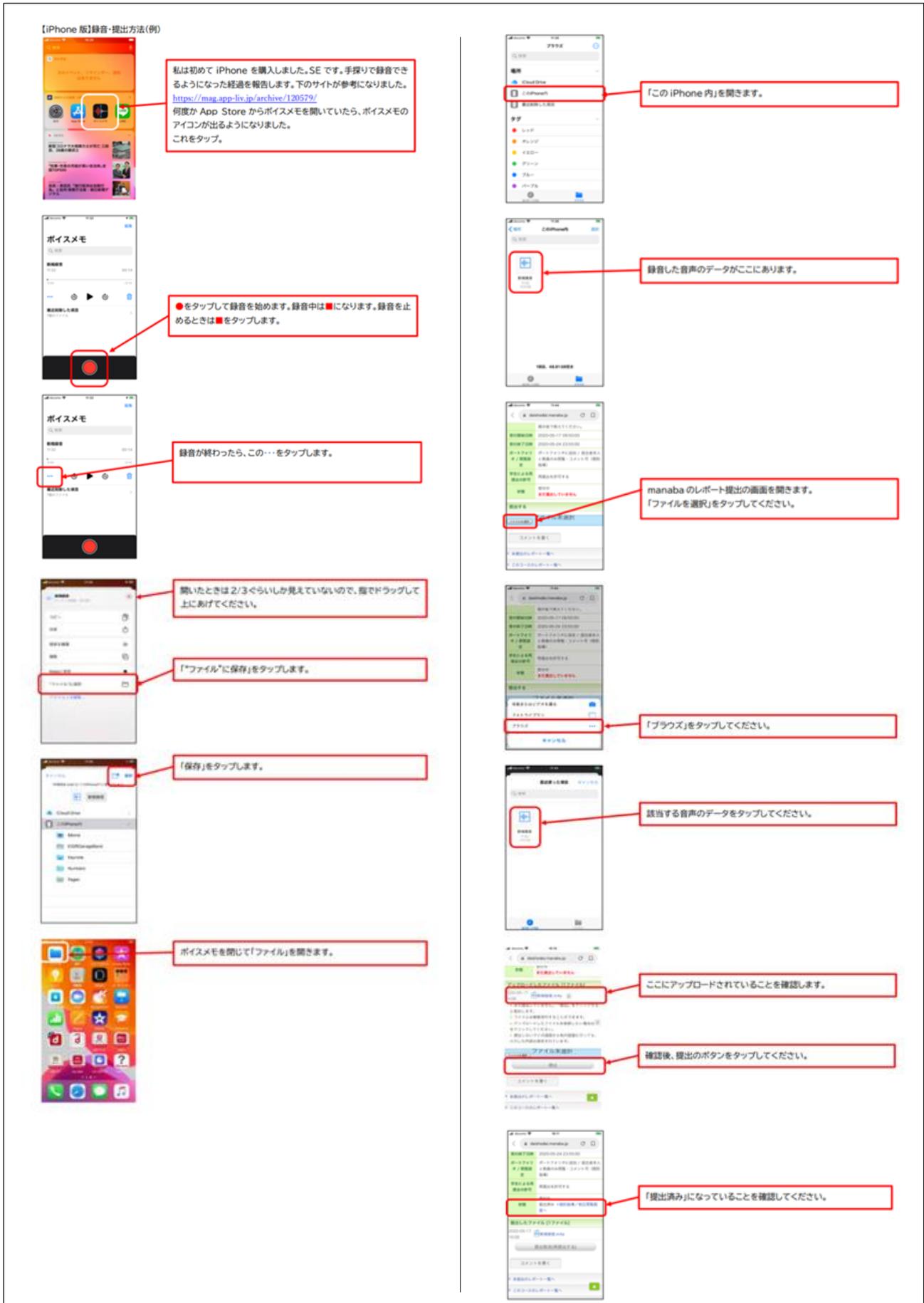


図9 録音・提出方法(i-Phone を使用した場合)

③ 録音・提出 ⇨ レポート

④ 録音・提出方法（例） ⇨ 掲示板

コンテンツ（p. 2）で音声を聞き十分に練習をした後、スマートフォンを使用して音読を録音させ、レポート機能でその音声データを提出するように指示しました。スクリーンショットや写真を示した iPhone、アンドロイド、IC レコーダを使用した録音・提出方法を掲示板で提示しました。図 9 は学生に示した iPhone による録音・提出方法です。

提出報告・録音方法の提案 ⇨ 掲示板

録音と提出に成功した学生に、掲示板で報告するように求めました。同じ授業を受けている他の学生が録音し提出できたと知れば、「自分にもできる」と学生が考えて取り組むだろうと考えました。

⑤ 次時の授業

第 3 回授業のコンテンツ（p. 1）で Unit1 のあらすじ後半の音読練習をして録音し、レポートで提出するよう指示しました。その後、コンテンツ（p. 2）で、教科書の本文中に空白を設け、あらすじにはなかった情報を聞き取るリスニングを行い、小テストで解答させました。対面授業では、空白にあてはまる単語を聞き取って書かせましたが、オンライン授業では、学生の作業を簡単にし、「できた」という感覚を持たせるために選択肢から選ぶようにしました。これも自動採点小テストで入力必須問題のマッチングを使用して問題を作成し、「学生の提出時に採点結果と正解を公開する」としました。「部分一致」で採点し、合格点をおよそ 3 分の 2 にあたる点数としました。解答後に解説を参考にして教科書本文全体を読み、理解した上でリスニングや音読を各自で行うように指示しました。

補講として、教科書の各ユニットの 3 ページ目から 4 ページ目の問題をして小テストで解答するようにしました。この 3 回の授業を一つのサイクルとし、前期に 5 つのユニットを行いました。

3. 学生の感想

最終授業でアンケート調査を行い、受講者 147 人中 112 人から回答がありました。以下は質問とその回答結果です。

- 「授業で行った活動は、あなたの英語力を伸ばすために役立つと思いますか。」

（表中の数字は人数、いずれの項目も回答人数は 112 人）

	まったく そう思わない	あまり そう思わない	どちら ともいえない	まあ そう思う	非常に そう思う
1 テキストの絵の順に英文を 並べ替える	2	9	16	65	20
2 並べ替えの解説を読む	2	3	15	50	42
3 リピーティング	2	3	12	40	55
4 音読を録音して提出する	3	12	17	36	44
5 リスニング	2	3	10	45	52
6 リスニングの解説	1	1	18	40	52
7 テキストの問題	1	3	13	66	29
8 テキストの問題の解説	0	4	15	46	47

- 「リピーティング（英語を聞き、それを声に出して繰り返す活動）をした感想を教えてください。」
調査回答者 112 人全員から回答がありました。

- ・英語の発音が難しかったので聴いてから声に出して読むを繰り返すとだんだん発音ができるようになるので良かったです。
- ・英語を聞くだけに比べて口に出すといつもより頭に入って発音の仕方も勉強で役に立ったと思います。アクセントの付ける位置などがわかりやすいです。
- ・録音して提出しなくてはいけないのでいつも以上に英語のリスニングを聞こうとした。
- ・読み方の分からない単語も英語を聞いていうことによって覚えやすかったし、その単語の意味はなんだろうかという興味が変わったので良かったと思いました。また、息継ぎをするタイミングもつかむことができたと感じました。
- ・普段声に出して読むことがないのでより真面目に取り組むことができました。
- ・最初は発音が難しいし、正直面倒くさいという気持ちがありました。ですが回数を重ねるうちに読み取ることがそこまで難しく感じることなく、楽しさを覚えました。
- ・発音の練習や英語に対する興味がわく。
- ・リピーティングはとてもいいと思いました。授業を受けられない状況でこんな口に出してそれをまた自分で聴けるということ。それもまた間違えてた箇所を繰り返せたのでとてもいいと思いました。
- ・最初は、この課題に下向きな心を持っていましたが、やっていくうちに自分の発音を聞いてだめだなと感じてたりしていました。気づいたら何十回も録音し直している時もありました。オンライン授業ですが、普通に授業を受けている感覚が持てて良かったです。

- 「前期の授業を受けて、英語学習についてあなた自身に変化がありましたか。変化があったとすれば、どのような変化か教えてください。」

調査回答者 112 人中 97 人から回答があり、そのうち「変化なし」と回答した学生が 10 人でした。

- ・中学、高校では、英語の授業についていけなかったけど、オンライン授業ということもあり、理解しようとすれば理解できたので英語が楽しいと思えるようになりました。
- ・いままで発音は 1 度聞けばできるだろうと思っていましたが、実際声に出して発音してみると全くできていないんだと実感しました。なので、発音練習も自主的にするようになりました。
- ・英語の文の意味を読み取るのが苦手なところについて今まではほったらかしにすることが多かったけど、前期の授業を受けて、自分なりに考えてわからないところは積極的に調べたりするようになった。
- ・英語の文章とイラストを合わせる問題は、英語の理解力も必要だったが、そのイラストをイメージしながら英文を選ぶようになった。
- ・毎週、課題が出るたびに単語を調べたり、リスニングするので、単語がいつのまにか記憶されて、町の看板などに書いてある英語に反応してしまうことがあり、わからないと「イライラ」してきて、その場や後で調べたりするようになりました。簡単に言うと、私自身、英語に興味を持ち始めました。
- ・自分のバイトしているところに海外の人がいます。英語ではなくその他の国の言葉も使ってみたいと感じた。

- 「前期の授業を受けた感想、困っていること、今後してみたいことなど、自由に書いてください。」
調査回答者 112 人中 47 人から回答があり、そのうち「特になし」と回答した学生が 7 人でした。

- ・前期の授業は今までに体験していないオンライン授業になってドキドキしていましたが何とか後少しで前期が終わると思うと、かなり充実した英語の授業だったと思います。今困っている事は、初めてのテストでそのテストがオンラインでやる事に対してです。どの様なテストになるのかが不安です。
- ・前期の授業はオンラインで、慣れるまで時間はかかったけれど解説付きのプリントなどで分からないところが解決することができたので良かったです。また、どういうストーリーなのかも英語を通して知ることができたので、他の英語にも興味をもっていきたいと感じました。
- ・小中高と英語の授業があまり楽しくなかったけれど大学ではオンラインだけど、わかりやすく、楽しく受けれています。
- ・書く読むだけでなく話したり聞いたりときまざまなことに組み合わせてとてもよかった。

- ・英語が苦手な私でも分かりやすく読みやすい文でとても学びやすかったです。音読をして提出するのは大事なのかと初めは思いましたが、沢山読み英文が頭の中に入ってくるのでとても大事で欠かせないと思いました。
- ・前期授業はオンラインで行ってきましたが、文字を読んで一人で理解を深めることが難しく、先生の解説を直接聞きたいなという風に思います。コロナで後期もオンラインとなれば、せめて ZOOM などでの授業を希望します。最小人数でもよいので登校し早く学生友達を作り、意見交換ができるようになりたいです。
- ・前期の授業を受けてみての感想は、とても分かりやすく解説までついていてオンライン授業になって最初のころはとても不安でしっかり理解できるのかと思っていましたが、理解することができてとてもよかったです。今後、後期の授業がどうなるかわかりませんが質問などを設ける形を取り入れてもいいと思います。
- ・自分の成績が今だいたいどのぐらいだろうとか、ちゃんと提出できてるのか、これで合ってるかなと不安に思うことがある。
- ・課題が多いとか、わかりにくいとかそう言う問題やなくて、オンラインというのに苛立ちを覚えました。後期から本当にオンラインではなく対面授業をお願いしたいです。
- ・音読の録音になにかコメントがあれば嬉しいなと思いました！後期はどうなるのか不安です。
- ・対面授業を早くしてみたいです!!

学生の感想には難しさや不安を伝えるものもありましたが、発音の向上、発音を意識するようになったこと、音読ができるようになったこと、リスニング力の向上、単語や英文が記憶に残ったこと、学ぶ姿勢、情意面の変化など肯定的な回答が多く見られました。メタ認知の能力も高まったように思われます。対面授業では十分な時間を取れませんでしたでしたが、学生は他の人の目を気にすることなく、何度も繰り返し音読に取り組んだようです。これはオンライン授業だったからこそそのメリットでした。

初回到提出した音声については、できるだけほめるようにし、改善点を示しましたが、その後は十分なフィードバックができなかったことに悔いが残ります。後期の授業の中で個々に伝えていきます。

対面授業が始まり、学生の不安は幾分解消されたかと思えます。今後も manaba course を併用し、音読についての利点を活かしていきたいと考えています。

解説動画配信を活用したオンライン授業の実施

高橋 美貴

(総合経営学部 経営学科 教授)

1. はじめに

今年度は、新型コロナウイルス感染症の影響で、すべての授業が完全オンライン授業となった。準備期間のない中での対応となったため、試行錯誤しながらの実施とならざるを得なかったというのが実情である。こうした中、どのように考え、どのように実践してきたかを簡単に報告したい。

2. ネット授業実施にあたっての基本的な考え方

新型コロナウイルス感染症の蔓延という異常事態の中で、精神的にもストレスを感じる状況下で行うことになった全面ネット授業であるため、「授業をどのように展開すべきか」「どういう気持ちで臨むべきか」を、学生の身になって考えてみる必要があると考えた。

新学期になって一度も大学に来ることもなく、いきなり家庭で独り学習しなければならない学生の姿を想像したときに、(数回でも対面授業が行われていれば、話は別かもしれないが)一度もその授業を受けていない段階で、いきなり「ネット配信された資料を読んで、理解しなさい」というのは、まず無理で

あると思えた。なんの予備知識もない中で、そのようなやり方では学生はやる気も起こらないし、興味を持って取り組めないだろうことは容易に想像できる。

「配信した資料を読んで、理解しなさい」とするだけであれば、我々教員としては一番楽ではあるが、その分、学生が苦勞することは間違いない。こうした困難な状況の中、教員が楽をする代わりに学生に苦勞をさせるやり方は、絶対避けるべきと考えたわけである。

そこで、まず考えたのは以下の点である。

①学生が、独りで学ぶときでも、楽しみながら興味を持って取り組める内容や方法にすること

ネットで独り学習する学生の姿を想像したときに、まず興味を持って楽しく取り組めるものにしなければ、多分学生は疲弊し、苦痛を感じるだけになるであろう。ネット授業であっても楽しく学べると感じてもらうことが最も重要だと考えた。これは、対面であろうがネットであろうが、間違いなく最も重要なことであるといえる。また、最初の1ヶ月程度は、初めての授業のやり方に、学生だけでなく、我々教員も慣れることをポイントと考えて取り組むことにした。

②できる限り教員の「顔」が見える授業にすること

③学生の状況を常に想像し、その背中を押すこと・コミュニケーションをとることを心がけること

2年生以上の学生であっても、教員の顔も声も、もちろんどんな教員であるかも知らない学生が、一度も大学に来ることなく学ぶ姿を想像したときに、限られた手段ではあるが、教員の「顔」が見える授業をする必要があると考えた。「顔」が見えるといっても、実際にネットで「顔」を出すという意味ではない。もちろんそのやり方もあるだろうが、私が考えたのは「無味乾燥なネット配信にはしない」ということである。できる限り「教員に教わっている」感覚で取り組めるようにしたいと考えたわけである。対面授業であれば、時に冗談を言ったり、話が横道にそれたり、といったことがあるが、ネット授業になれば、おそらくそのような「余白」のない、無味乾燥なものになってしまう。可能な限り、そういった「遊び」の要素も取り入れたいと考えた。

そして、常に学生を意識し、コミュニケーションをとりながら、「お互い」頑張ろうという気持ちをできるだけ伝えていくことを心がけたいと考えた。対面授業であれば、教員の「熱意」や「人となり」なども伝わるかもしれない。が、ネット授業になったからこそ、意識してそれを伝える必要があると考えたわけである。特にネット授業は、学生の直接の反応をつかむことが難しいからこそ、お互い協力して頑張ろうという気持ちになってもらう必要があるということである。例えば、すべての授業で自己紹介動画を配信し、その中で「困難な状況だけど一緒にがんばりましょう」というメッセージを伝え、その後の授業でも可能な限り励ましの言葉を添えるよう心がけた。

④毎回の課題などは、ポイントを押さえたうえで、学生の過度な負担にならない程度にすること

例えば、毎回1～2ページ程度のレポートを提出させることは、その授業だけを考えればそれほど負担ではないかもしれない、しかし、学生は大体11～12科目を同時に履修している。それらの授業で毎回1ページ、2ページのレポートを課されれば、毎週10ページ、20ページのレポートを書くことになる。しかも、配信された資料だけを頼りに、である。もちろん大学生であれば資料を読み、レポートを毎週仕上げる程度のことはやってほしいところである。が、この状況の中で、そのやり方で、誰にも相談もできないまま3ヶ月間、意欲を切らせることなく続けることができるとは私には思えなかった。そして、その苦痛は学ぶ意欲の減退につながり、結果としてネット授業や大学教育に対する不満となり、お互い不幸になるだけだと考えた。

楽しく興味を持って学ぶことができ、それを継続して行けること。そして、大事なポイントは押さえたうえで過度な負担を避ける。そのようなやり方を基本として、授業を進めていくことが必要だと考えた。

⑤学生自らが考え調べ、学ぶ姿勢、つまり主体的学びを引き出せるような授業にすること

対面授業では受け身的な学修になりがちになってしまうが、自学自習をせざるを得ないネット授業の状況をチャンスと捉え、いわゆるアクティブラーニング的なことができるのでは、と考えたわけである。そして、大事なことは、このような学びが本来の大学生の学びであり、それができる環境にある「今がそのチャンスである」ことを学生にも感じてもらいたいと考えた。

3. ネット授業の実践報告～解説動画の活用

こうしたことを考えて、行き着いたやり方は、

- ・可能な限り授業内容を絞る
- ・資料だけでなく「解説動画」を作り配信する

というやり方である。それだけで十分理解できるような解説動画を作成・配信し、視聴してもらう。さらに、配付資料を読めばより深く理解できる、という方法で授業を展開することである。

動画は、(疑似的)講義をする姿を自撮りして配信する方式ではない。「教材」として使える動画を作成したものである。自撮り講義動画を作ることも考えたが、プロのアナウンサーのようにカメラに向かって1人でしゃべって、満足できるような動画とする自信も技術もなく、大学に来られない状況では、それを撮影する環境もなかったことによる。

解説動画を作ろうと考えたのは、教務課の依頼で新生向けガイダンス動画を制作し配信したところ、かなり好評を得たことが背景にある。また、ネット授業が始まったときに、ガイダンスも兼ねて、授業に関心を持ってもらう目的で授業概要を解説した動画を作成し配信したところ、「わかりやすかったので、次回以降も動画をお願いします」といったコメントが数多くあったことで、解説動画の配信をやめられなかったという、学生からのプレッシャーがあったというのが正直なところである。

こうして極力、動画を配信するとして展開した結果、最終的に70本を超える動画を制作することとなった(各授業内容に合わせて共通素材を一部アレンジしたものや、新生向けのガイダンス動画、全学共通のゼミナールIAの取り組み用動画も含めての本数)。

以下、私の担当する授業のうち、講義科目とパソコン実習科目について、具体的にどのようなやり方をしてきたのか簡単に紹介する。

3.1. 講義科目での実践例

担当した授業は、「デジタルメディアⅠ」と「コンピュータシステムⅠ」である。通常であれば、この2つは後期科目の基礎として、どちらかと言えば技術的な事項を講義する科目である。

この授業で取り扱う技術的な内容を「資料を読むだけで理解できるか」と考えたときに、初めて聞く技術用語や概念を資料だけで理解するのは、(特に予備知識のない初期段階では)多くの学生にとっては困難だと思われた。対面授業であれば学生の反応を見ながら補足説明やたとえ話などを交えた話もできるが、ネットではそれも困難である。

毎回の授業で配付しているプリントはテキスト代わりに用意したもので、一定の予備知識があれば十分理解できるものではあるが、授業で話しているようなことまで書き込むとすると、おそらく対面授業で配付する資料の2倍から3倍のページ数になってしまう。さらに、それを読んで理解しろというのは

学生に負担をかけすぎで、苦痛以外の何物でもないと思われた。

そこで、内容の一部を見直し、動画を見れば理解できる内容、お話として聞けば理解できる内容、楽しく学べると思われる内容に絞ることとした。もちろん、授業の目的はきちんと踏まえたものにするのは当然であるが、あまり多くのことを盛り込もうとせず、独り学習でも無理のない内容に厳選した。その代わりに、解説動画では重要なポイントを確実に理解できるようなものにするのを心がけた。「動画を見て学習」し「配信資料を読んで確認」する流れで学べるようにした。

そして、重要ポイントをきちんと理解したかをアンケートや練習問題で確認することとした。練習問題には何回も解答できるドリル機能を使った。これは、全問正解になるまで動画や資料を見直したりして取り組み、重要ポイントを全員に理解してほしいということで行ったものである。必要最低限の内容に絞ったことから、このようなやり方を採用したわけである。

解説動画については制作にかかる負担も考え、2つの科目である程度共通している内容に関しては、1つの動画をそれぞれの科目向けにアレンジしたものを作ることにした。例えば、コンピュータの歴史はどちらの授業でも取り扱っているが、「デジタルメディアⅠ」ではメディア史の観点から、「コンピュータシステムⅠ」ではコンピュータ技術の発展の観点から編集し、解説を入れた動画を作るやり方である。なお、これらの授業で作成した解説動画はゼミナールのテーマに適したものもあり、そこでも活用した。

3.2. パソコン実習科目での実践例

「マルチメディア情報表現Ⅰ」は、本来ならパソコンを使ってアニメーション動画などを作成し、画像や音声などの取り扱いと、作品の制作を通して「情報を表現し、伝える」ことを学ぶ授業である。

ネット授業となり、パソコン実習が不可能となったことを受けてまず考えたのは、授業の目的である「情報を表現し、伝える」ことをネットで展開する方法である。つまり、自宅で紙と鉛筆で「表現し、伝える」ことを実践してもらおうと考えたわけである。例えば、最初の回に「似顔絵自己紹介」という課題を行った。これは、自己紹介として手書きで自分の似顔絵を描く課題である。そして、提出して終わりとするのではなく、提出作品を1つの動画作品に仕上げ、次の回に全員で鑑賞し、コメントし合う取り組みである。

課題制作を何回か行ったが、それらはすべて動画作品としてまとめ、受講生に見てもらうようにした。課題を提出して終わりではなく、このように受講生全員の作品を1つの動画、つまり共同制作作品としてまとめることで、授業に参加しているという実感、また、独りではなく、みんなと一緒に学んでいるという実感を持ってもらえればと考えたわけである。そして、動画作品に仕上げるのは教員である私であり、それにより教員である私も学生と共に1つの作品を作る仲間になるわけである。

この授業では、そのほかにも色々な面白いことを試みてきた。例えば、社員研修などで行われるコミュニケーションゲームなども取り入れたりしてみた。ある学生は「次はどんな課題だろうといつもワクワクして、唯一次回が待ち遠しいと思える授業でした」というコメントを書いてくれており、楽しく学ぶ中で、授業の目的である「情報を表現し、伝える」ことを実践できたと感じている。なお、この授業と同様の取り組みを、パソコン実習を予定していたゼミナールでも実施した。

3.3. 学生の反応から見る成果

動画配信を併用したネット授業の展開が、学生の学習成果にどの程度結びついたかは明確ではない。ただ、学生のコメントなどを見ると、当初の目的通り、楽しみながら興味を持って取り組んでくれたようである。

【学生のコメント例】（前期の振り返りと、頑張った自分をほめてください）

- ・自分自身も、慣れないオンラインでの授業なのですが、課題や授業を漏らさずにしっかり出来たことは良かったなと思います。先生も、慣れないと思われるオンライン授業の中で、工夫をして、私たちが興味を示しやすいような授業動画を作ってください、ありがとうございました。
- ・他の講義では動画を通して行うという形態がなかったので、分かりやすく良かったです。学びやすくするために動画を作成し提供していただいていたありがとうございます。
- ・対面とオンラインとの授業は全く違う新しい感覚を覚えた。オンラインは自ら取り組む形なので集中しやすかったが、難しいと思うところもあった。この授業は動画も見やすく編集されていて先生も頑張っているのだと思い、私も頑張れました。
- ・最初は、初めてのオンラインで不安だったけど、先生が楽しくしてくれました。課題も全部やりきりました。自分頑張りました!あと、先生がとても生徒おもいだと思いました。動画や資料までつくってくれて勉強しやすかったです。この回の動画の先生からのメッセージをみていい先生だなと思いました。この授業をとって良かったです。ありがとうございました。

上にあげたのはごく一部であるが、大半の学生が似たような（対面授業ではあまり聞くことのなかった）感謝のコメントを書いている。また、「〇〇に興味を持ったので自分でも調べたいと思います」というコメントを書いてくれた学生が何人もおり、「自ら考え調べる」という「主体的学び」を多少なりとも引き出せたことも感じている。

なお、最終の振り返りは、「頑張った自分をほめてください」という条件で書いてもらった。「不自由でしんどくて不安な中、お互い頑張った!」という気持ちを学生と共有したかったこともあって、このような質問とした。

3.4. 課題と反省

全面ネット授業ということで、様々なやり方で先生方も苦勞されたことと思うが、動画で解説する作業をしてみて一番の課題は、その制作に要する負担である。時間的な負担（大体1本の動画作成に2～3日、長い動画になると1週間かかることもある）ももちろんであるが、退屈しないでその動画教材を見もらうためには様々な工夫が必要になる。ナレーションなども工夫する必要があり、そのようなことを考えれば考えるほど時間も手間もかかることになる。もちろんこのことは対面授業でも同じなのであるが、対面であれば学生の反応を見ながら対処することが可能である。学生の反応が見えない中での教材作りは、精神的にも大きな負担であった。

ネット授業ということで、当初予定した内容を大幅に絞らざるを得なかったが、100 教えて5～10 しか身につかないより授業よりも、20 教えて15 身につく授業であると考えれば、かえって良かったのかもしれないと感じている。このことは今後の授業内容の見直しにも活かしたいと思っている。

4. おわりに

以上、簡単ではあるが、全面ネット授業をどのように考え、実施してきたかをまとめた。動画教材を可能な限り制作してきたが、かなり効果的であったと考えている。半面、制作の負担はかなり過酷なものがある。しかし、今回作成した解説動画は今後も活用できるものであり、無駄ではなかったと考えると、作る価値はあったと考えている。何より、学生の興味を失わせることなく前期授業を終えることができた。また、学生のコメントを読むとその苦勞は報われたと感じている。

とにかく、こうした困難な状況の中、毎回の授業に真摯に取り組んでくれた学生たちの頑張りに拍手を送りたいと思う。

フィールドワークゼミナールにおけるオンライン授業の取り組み事例

宍戸 邦章

(公共学部 公共学科 教授)

1. はじめに

演習科目は、少人数教育の核といえる授業である。その内容は学生同士のディスカッションやグループワーク、学生による研究内容のプレゼンテーションなどであり、学生が最も主体的に学ぶことができる場であろう。私が担当している演習科目は、フィールドワーク型ゼミナールであり、文献研究や座学に加えて、学外の協力機関とともに「社会的問題」を把握し、それを解決するための実行可能な方策を学生が考え、具体的な取り組みを実践するゼミナールである。

今年度の前期は新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受けて、学生が大学で集まることも、学生が学外に出てフィールドワーク活動を行うこともできなくなった。教員が学生に知識を伝えるだけなら、動画やマナバコースのシステムを利用して、オンラインである程度支障なく行うことができる。しかし、演習科目、なかでもフィールドワーク型のゼミナールの運営は、学生同士のディスカッションやプレゼンテーション、学外での調査活動および実践活動が含まれるために、コロナショックの影響を最も大きく受けた授業である。

今回のFDニューズレターでは、前期の私のゼミナールの運営状況を紹介するが、私にとってオンライン授業は初めての経験であり、他の先生方の参考になるようなことは何もしていない。しかし、今回、このような執筆の機会をいただいたので、前期の運営を振り返っておきたい。

2. いくつかのオンラインのシステムの利用

2.1. マナバコース

大学からのガイドラインにもあったとおり、ゼミナールでオンライン授業の中心になったのはマナバコースである。まずは、学生の自宅でのインターネット環境について、4月に独自にアンケートを実施した。私のゼミ生は1学年25名ずつで、2～4年生で75名になる。回答してくれた73名のうち、自宅にネットにつながるパソコンがあったのは54名(74%)で、そのパソコンにどのようなソフトがインストールされているのか尋ねたところ、Wordが51名、Excelが48名、PowerPointが41名であった(図1参照)。結局、スマートフォンでしか授業に参加することができない学生が20名ほどおり、それに対応した運営が求められた。

学内に学生を集めることもできず、学生を学外に連れ出すこともできない状況のため、前期は座学を中心に実施した。図書館に入ることす



図1 マナバコースのアンケート結果画面

らできない状況であったため、ゼミのテーマである「福祉とまちづくり」に関連した論文を J-Stage のサイトで各自に調べさせ、興味のある論文を探して読んでもらい、その内容を 400~800 字程度で要約し、各自にその文面をマナバコースで提出させた（期限は 2 週間）。要約内容は Zoom を利用して簡単に発表させた（1 コマ分）。表 1 は学生の要約例であるが、驚いたことに 75 名全員が提出した。学生には他の学生が提出した要約内容もすべて読ませ、どの論文が最も参考になるものであったか投票も行った（期限は 1 週間）。読んだり、書いたりする時間を十分に取れる点が、オンラインゼミの利点であると感じた。

2.2. Zoom

私のゼミでは、「子どもの居場所づくり」を 1 つのプロジェクトとしており、瓢箪山地域と枚岡西地域では 150 名ほどの小学生を集め、夏休みの 5 日間、サマースクールを開催している。今年度は感染拡大防止のため中止となった。しかし、学生にはコロナ禍でできることを考えさせ、オンラインで小学生向けのクイズ大会をすることとなった。この案内は自治会の回覧板で約 4,000 世帯に配布された。

中身の企画について、マナバコース経由で実施すると、学生間のやり取りに多くの時間がとられることがわかった。そのため、リアルタイムの話し合いの場を作るために Zoom を利用した。パソコンから入る学生はパソコンから、スマートフォンしか利用できない学生はスマートフォンから参加させた。75 名中、全員が Zoom を利用することができた。Zoom は話し合うだけでなく、ファイルを共有して見ることができたり、チャットで意見を書き込んだりできることが利点である。ただし、通信障害や音声のハウリングの問題があること、司会役が一方的にしゃべりがちになることなど、いくつか課題もあった。

2.3. LINE

LINE は学生にとって最も親しみのある日常のコミュニケーションツールである。学外で緊急の連絡（場所や時間の変更など）をしなければならないフィールドワークゼミナールの運営では欠かすことのできない情報ツールであり、コロナ禍以前から日常的に利用している。LINE でグループを作ることから始め、学年別のグループ、全学年が参加できるグループ、プロジェクト単位の班のグループを形成し、コミュニケーションをとっている。2 年生のゼミでは、4 月以降 1 度も直接会っていない集団であり、私も学生たちも見知らぬ者同士の集まりである。このような場合、プライベートなコミュニケーションツールである LINE の使用には注意が必要な面もあるが、これまでのところ問題は起こっていない。

LINE でグループを形成した後には、ノート機能のリレー方式で自己紹介をした。自分の写真または自分が好きなもの（こと）と自己紹介の文章（400 字程度）をグループ内で共有する仕組みであり、全員が参加してくれた。また、学生たちと顔を見ながら話し合いをしたい時には、LINE のグループ通話を利用することもあった。Zoom よりもお手軽で利用しやすく、短時間の打ち合わせならグループ通話で済んでしまう。この一方で、ファイルの共有がしにくい点が課題であろう。

2.4. 動画キャプチャソフトと YouTube

ゼミナール運営の過程で、学生に課題の詳細な指示やパソコンの細かな操作方法などを説明する必要が何度かあった。PDF 化した資料や Zoom などでも説明しにくい場合には、動画キャプチャソフトを利用して説明した（図 2 参照）。このソフトは自分のパソコンのデスクトップの画面と Web カメラを同時に録画するものである。私の姿や声と同時に、私が操作しているデスクトップの画面がそのまま録画される。この動画を YouTube に限定公開し、それを学生に見てもらった。

この動画の作成はそれほど負担にはならず、教室で PowerPoint の画面を提示して説明している雰囲気であり、便利であった。前期の 400 名前後の履修者がいる講義でも、何度かこれを利用した。限定公開と

は言っても、URL が分かれば誰でも視聴できてしまう。情報の閉鎖性を確保できない点が難点である。

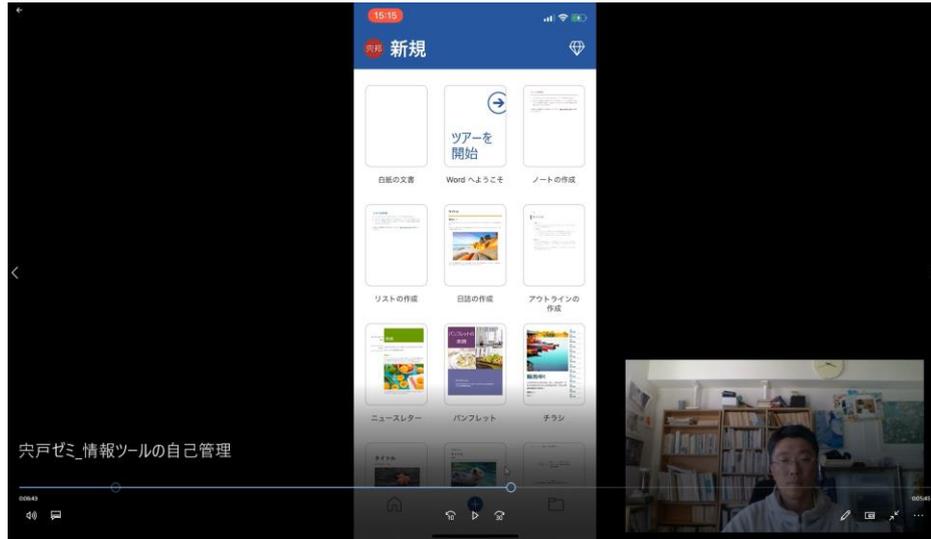


図2 Wordのレポートをスマートフォンで作成するやり方を説明する動画例

3. おわりに

前期に私がオンラインで行ったフィールドワークゼミナールの運営方法についての紹介は以上である。特別に何かしたつもりはなく、どの先生方もすでに利用されているものばかりで、何の参考にもならないかもしれない点、お許しいただきたい。

オンラインでのゼミナール運営を振り返っての私の率直な印象は、「やはりゼミは対面でしたい」ということである。特に見知らぬ者同士が集まっている2年生のゼミナールは、友人関係をオンラインで築くことは難しく、残念ながら前期中ずっとよそよそしいままであった。おそらく、25名の学生はお互いに顔と名前すら一致していないだろう。また、新しいことを何か始める時には、お互いが対面で喧々諤々と意見をぶつける必要があり、Zoomではそれが難しいという印象である。オンラインで数名のグループワークを行う場合は、Zoomの操作の慣れと同時に、司会役のコーディネート能力が問われ、能力の高い取りまとめ役がないグループでは、オンライン上の議論は難しい印象を持った。

とは言え、この前期にあれこれ悩みつつ取り組んだオンライン授業の経験は、今後も大いに役立つものではないかと思っている。対面式の授業に戻ったとしても、学生同士のちょっとした打ち合わせなどはオンラインで行ったほうが便利である。コロナ禍でオンラインが浸透したことにより、複数の身体を特定の時間、特定の場所に集める理由のハードルが上がったと感じる。私たち教員は学生を教室に集める際、「なぜオンラインではダメなのか」と自問自答する機会が増えてはいないだろうか。

コロナ禍で対面授業のあり方は相対化された。図3は時間と場所の拘束によって分類した授業運営の形態である。それぞれの運営形態には長所と短所がある。ゼミナールの学生や一般講義の学生(約700名)に尋ねたところ、それぞれの運営形態の長所と短所でよく出ていた意見は表2のとおりであった。今後は対面式授業が中心になるものと想定しているが、学生の意見を聞きながら、Zoomや動画配信など、ハイブリッドな試みも検討していく必要があるだろう。

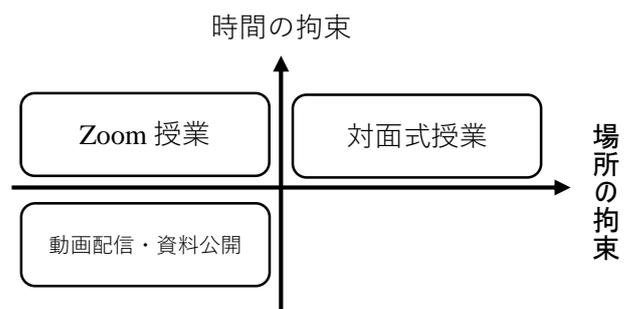


図3 授業の運営方法の分類

表2 授業形態別の長所と短所(学生の意見でよく目にしたもの)

	対面式授業	Zoom 授業	動画配信・資料公開
長所	<ul style="list-style-type: none"> ・その場ですぐに質問できる ・臨場感・緊張感があり、集中でき、やる気もでる ・他の学生や教員との出会いがある ・教員が学生の雰囲気を知りながら授業をしてくれる 	<ul style="list-style-type: none"> ・通学や学内での感染リスクがない ・通学時間が不要/電車代がかからない ・リアルタイムで質問もできる ・ファイルの共有もできる 	<ul style="list-style-type: none"> ・通学や学内での感染リスクがない ・自分のペースで学ぶことができる ・通学時間が不要/電車代がかからない ・講義内容を何度も見返すことができる ・課題についてじっくり考える時間がある
短所	<ul style="list-style-type: none"> ・感染リスクを完全にはなくせない ・時間と場所の拘束が煩わしい ・周囲がうるさく集中できない ・早すぎてノートが取れないことがある ・印刷物が多くなりがち 	<ul style="list-style-type: none"> ・聞いている方が受け身になりがち ・緊張感がない ・学生同士の関係は築きにくい ・人数が多いとラジオを聴いている感じに近く、時間を縛る理由がわかりにくい 	<ul style="list-style-type: none"> ・だらけてしまう/緊張感がない ・生活習慣が乱れる ・孤独感がある ・動画なしで文字資料だけだとしんどい ・家で勉強できる環境がないとつらい ・パソコンが苦手だとつらい ・課題が多くなりがち ・出会いがない

OBP ゼミナールⅢ・Ⅳにおける Web 会議システム導入の試み

林 幸治

(総合経営学部 経営学科 教授)

1. 講義に Zoom を導入する過程

2020 年の前期授業はオンラインで実施するとの方針の決定を受けて、300 名を超す講義をはじめ、大教室で行う講義は、パワーポイントで作成した資料を manaba で配布し、毎回小テストを学生たちに取り組んでもらう形式で行った。また、「ゼミナールⅡ」と「ゼミナールⅣ」については、5月初めにゼミナールの履修生の通信環境を調査したところ、数名の学生が Wi-Fi などの通信環境が未整備であることや、パソコンを所有していない、あるいはパソコンを持っていても Microsoft の Office 等のソフトがない、といった回答が寄せられたため、こちらも manaba を使った形式での講義を行った。

一方、OBP コースの3年生、4年生のゼミナールは、manaba と Web 会議システムである Zoom を併用した講義を行うことにし、さらに連絡手段として SNS アプリの LINE を用いることにした。その前提として、OBP コースの特典として学生は1年次に1人1台ノートパソコンを貸与されていることがあげられる。

2. オンライン講義で設定した目標

今回、OBP コースのゼミナールでオンライン講義を行うにあたり、2つの目標を設定した。1つ目は ICT (情報通信技術) を活用した講義形式に OBP の学生に慣れてもらうこと、2つ目は Web 会議システムで学生とコミュニケーションがどの程度とれるかを把握することである。

Zoom を活用して行った講義は、私が担当する「OBP ゼミナールⅢ」と「OBP ゼミナールⅣ」の2つで、「OBP ゼミナールⅢ」の受講生は16名、「OBP ゼミナールⅣ」の受講生は13名であった。29名全員に通信環境を尋ねると、すべての学生が自宅もしくは実家にネット環境が整備されていた。よって、29名全員がパソコンも持っていて、ネット環境も整備されていることから、Zoom を用いた講義を実施しても

問題ないことが判明したため、オンライン講義の1パターンとして Zoom での講義を実験的に行うことに至った。なお、LINE は学生との個別の相談手段および連絡事項の一斉送信を行う際に用いた。

3. オンライン講義を始める前のトラブル

講義を始める準備段階で1つの問題が発生した。それは、4年生に貸与しているノートパソコンには Zoom で必要な web カメラがついていなかったことである。彼らが入学した2017年当時は、3年後に新型コロナウイルス感染症が流行し、オンライン講義が必要に迫られるとは予想できなかったため、ノートパソコンの装備としてカメラの有無は重視していなかったのである。多くの会社や大学でオンラインでの会議や講義を行うことになったため、5月の段階で市場から Web カメラが消えていたので入手も困難であった。幸いにも、すべての4年生がカメラ付き PC もしくはスマートフォンを持っていたため、それらのカメラを用いてミーティングに参加することで Zoom での講義は可能となった。

4. Web 会議システムを用いたオンライン講義の実践

「OBP ゼミナールⅢ」の講義は、プロジェクトチームごとに進捗状況を Zoom にて報告する形式で進めた。コロナ禍で開催が危ぶまれたものの、「日経ビジネス西日本インカレ」「オリックスバファローズマーケティング調査」「大学生観光まちづくりコンテスト」の3つについてはオンライン形式での開催が決定されたため、これらを目指して発表に向けた準備を行うことにした。

例年は、学生たちは講義内で指摘された各プロジェクトの課題について、リアクトのプロジェクトルームで夜遅くまで議論し、次のゼミの講義時間までに修正する作業を行っていた。しかし、今年に入構禁止措置のためリアクトに入ることができず、自分たちで Zoom のミーティングルームを開設したり、LINE の通話機能を使ったりして、適宜議論したようである。進捗状況については manaba のプロジェクト機能を用いて資料を提出させた。講義中に回線が切断される学生が散見され、その学生には LINE で連絡を取ることで対応できた。この講義では、manaba と Zoom、そして LINE の3つを活用することで欠席する学生はほとんどおらず、スムーズにオンライン講義を行うことができた。

「OBP ゼミナールⅣ」では、OBP コース修了論文の進捗状況について PowerPoint でまとめて報告することを学生に課した。あらかじめ1回の講義で2名が報告するようスケジューリングを行い、課題の設定、仮説、調査方法、調査結果、結論についてまとめさせ、作成したファイルを manaba のレポートへアップロードするよう学生に指示した。

Zoom でプレゼンテーションする際、本来は学生のパソコンで Zoom に参加し、パソコン画面を参加者と共有し、スライドショーの操作も自ら行わなければならない。しかし、前述したように、4年生のパソコンにはカメラが装備されていないため、彼らのパソコン画面を共有するにはパソコンとスマートフォンの両方でログインし、プレゼンテーション画面だけはパソコンから共有するという作業をしなくてはならなかった。こういった学生の手間を回避するために、manaba にアップロードされた学生のファイルを私が開いて Zoom にて画面共有し、学生の指示のもと、スライドショーの操作を行い対応することにした。この講義でも、manaba と Zoom、そして LINE の3つを活用することでオンライン講義を行うことができた。

5. オンライン講義を経験した上での振り返り

以上の経験から、当初の目標であった Web 会議システムを用いて学生とのコミュニケーションを図ることはできたと考える。コロナ禍で自宅待機している学生たちの様子を、画面を通じてではあるが把握することができ、話す姿や表情から窺い知ることができた。特に4年生からは就職活動の様子を直接聞

くことができ、その状況を皆と共有できたことは良かった。manaba の掲示板でのコメントのやりとりだけではできないコミュニケーションが図れたといえよう。

もう1つの目標であった学生に ICT を活用した講義に慣れてもらうことについては、こちらも達成できたと考える。4年生の話によると、今年度の就職活動における選考のほとんどがオンラインで行われたが、Zoom をゼミナールで使っていたので問題なく対応できたとのことであった。さらに、他大学との合同合宿は中止となったが、その代わりに Zoom を用いた合同発表会を実施した。そこでは、本学の3年生も他大学の学生に比べて遜色なく Zoom に対応できていた。このように、講義を通じて社会で活用されている Zoom の扱いに学生が慣れたということも大きな成果であったと考える。

一方、Zoom での講義の課題もあった。まず、Zoom のミーティングでは話す人が1人に限定されており、その間、他の人は待っていることになる。学生が意見を言いたくてもそのタイミングがつかみにくく、議論が活発に展開することにはつながらなかった。プレゼンテーションを行うには便利なツールであるが、車座になり机を囲んで1つのものを作り上げていくグループワークという点では難しい側面があるようだ。ただし、今回は用いなかったが、Zoom のブレイクアウト機能を活用して、学生たちをグループに分けて議論を行うような仕掛けを用いれば、もしかしたら議論が行われたかもしれない。

以上のように、「OBP ゼミナールⅢ・Ⅳ」では、manaba の機能、Zoom、LINE を駆使して2020年度の前期の講義を進めてきた。オンラインでのグループワークをどのように進めるかという課題は残っているが、対面式の講義には及ばないものの、ゼミナール形式の講義では学生たちとコミュニケーションを図りながらオンライン講義を進めることができた。

6. 今後の課題

大学の講義だけではなく、社会のあらゆる場面でウェビナーや Web 会議が広まっていくことが想定され、Web 会議システムの活用が大学教員にも迫られる。このことから、大学教員は Zoom、Google Meet や Microsoft Teams などの Web 会議システムの活用方法を学ぶこと、そして動画配信や LINE を活用したコミュニケーションなどを巧みに講義に取り入れ、学生の学習効果を高めるスキームの構築方法を学ぶ機会が今後は必要であろう。



結びにかえて

加藤 司

(総合経営学部 商学科 教授)

新型コロナウイルス感染症の影響で、前期はオンライン授業を実施せざるを得ず、戸惑われた先生方も多かったに違いない。私もその一人で、根っからのアナログ人間のため、動画配信などできるはずもなく、自分のできる範囲でどのような形態のオンライン授業を実施すべきか悩んだあげく、結局講義のテキストをオンデマンド型で配信するという、これまでとそれほど変わらない形態を取ることになった。

今回、取り組み事例を報告された先生方は、いずれもオンラインにふさわしい、あるいはオンラインを活かした授業形態を工夫されており、私自身のこれからの授業形態を考えるうえで大変参考になった。こうした取り組み事例を事前に知っていたら、前期の授業も変わったのではないかと思いつつ、どのような点で参考になったか、自分の授業も振り返りながら感想を述べることにしたい。

そもそも、オンライン授業はどのような形態があり、一般的にどのような取り組みが行われているの

だろうか。気になったのでネットで確認したところ、神奈川大学が学生と教員を対象に行った「遠隔授業の有効性と課題」に関するアンケート調査結果*が見つかった。これは、授業を行う教員と受け手である学生の意見の違いを確認するうえでも興味深い内容となっている。

神奈川大学は理科系学部を有する総合大学であり、本学とは学部構成や学生規模が異なり、またオンライン授業に対する方針も異なるため、単純に2つの大学を比較することはできない。この点は十分承知したうえで、神奈川大学で実施されたオンライン授業の方法を見てみると、教員の回答で最も多いのが「オンタイム型(Zoom)」62.1%であり、続いて順に「資料・課題提示型(資料・文献提示、レポート課題)」37.7%、「オンデマンド型(動画・音声収録)」20.5%、「オンデマンド型(パワーポイント動画)」19.6%、「その他」5.8%となっている(回答数882人、複数回答、他に「担当していない」という回答18.8%)。私の取った授業形態はオンデマンド型ではあるが動画ではないため、この項目の中では「資料・課題提示型」に分類されるのかもしれない。私のやり方はZoomほどではないとしても、それほど少数派ではなかったことが確認される。

ここで、私が前期にオンライン授業を行ううえで工夫した点を以下①～⑤にまとめてみる。

- ①通常の対面授業では、学生が授業中に発言すると加点するというインセンティブをつけて授業への参加意欲を促し、双方向でのやりとりを通じて授業の理解を高めるやり方を取ってきた。しかし、オンライン授業ではそうしたやり方は取れない。学生の勉強意欲が著しく低下することが懸念されたため、毎回提供されるテキストは「口語調」とし、また(学生から多いという意見が出されたこともあるが、**高橋先生も指摘される通り**)分量も少な目にして理解度を高めることを心がけた。
- ②理論の説明を補完する資料として、ビジネス誌や日本経済新聞などがネット上で提供している企業事例を取り上げたり、YouTubeのURLを張り付けたりして(内容を吟味したうえで)活用した。
- ③毎回マナバのアンケート機能を使って質問を受け、学生からの質問に回答するとともに、他の学生にも参考になりそうな質問については次の授業で回答を紹介した。**柴田先生の感想にもあったように、対面授業の時よりも質問は多く**、中には「こんなに詳しく説明してもらったのは初めてだ」といった感想を寄せる学生もあった。きめ細かく対応することで、これまで以上に学生の理解を高めることができたという実感が得られた。
- ④学生の理解度を深めるために、小テストを3回実施した(いずれも記述式で4問、採点には時間がかかった)。学生が解答した中から模範解答を選択し、それを示しながら評価基準を明確にして解説した。学生の模範解答を示すことで、「自分とは全く違うことを考えている学生がいることは刺激になる」といった感想を寄せてくれた学生もおり、学生相互の学びを促進する効果が見られた。
- ⑤期末テストはレポートという形式を取らざるを得ず、「授業の中で関心を持ったことや疑問に思ったことをテーマとして、それを深く分析しなさい」を課題(試験期間よりも前倒しで公開)とした。これにより、学生たちは復習することで自分が何を疑問に思ったかを突き詰める一方、他の資料などを読みながら疑問を解いていくプロセスをたどった。予想以上に多くの学生が、「自らの疑問を調べ、それを自分の言葉で理解し、表現することは楽しい」という感想を語ってくれた。これが、**高橋先生の言われる「主体的な学び」**につながるものと期待したい。

以上のような体験から、学生はこれまで以上に真剣に小テストや期末テストに取り組んでくれ、授業に対する理解度も深まっているという手応えを感じた。もっとも、後日ゼミナールの学生に講義の感想を聞いたところ、「難しかった。他の授業の課題が多く、忙しくて時間に余裕がなく、わからなかったので友達に教えてもらったりした」と話してくれた。柴田先生や西嶋先生が指摘されているように、オンライン授業は学生の環境や意欲によって教育効果に個人差がある点に留意すべきであろう。

このような学生が少数派であることを願うばかりであるが、宍戸先生が指摘されているように、対面式授業と Zoom や動画配信・資料公開による授業には、それぞれ一長一短ある。オンライン講義では、「講義内容を何度も見返すことかできる」「課題についてじっくり考える時間がある」という長所を活用できれば、学生の学習効果を上げることができると言えそうである。この点は、図1の「通常の対面授業に比べ、遠隔授業を受講して実感していること」に関する神奈川大学の学生の回答にも表れている。各項目について「とても思う」「やや思う」の肯定的評価を見ると、「大きな問題なく授業は受講できて」おり、「配布資料が受け取りやすい」「課題を適切に提出できている」といった遠隔授業のメリットが実感される。

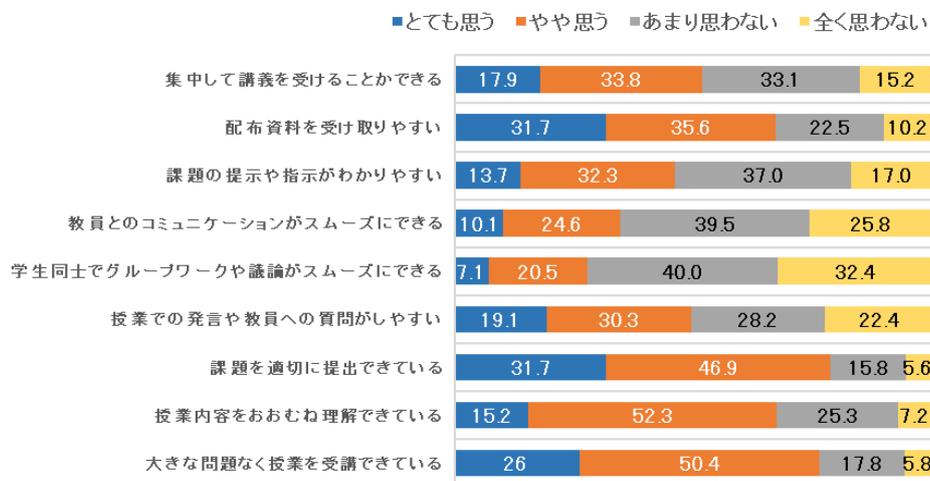


図1 学生が遠隔授業を受講して実感していること（回答数 3,900 人）

この一方で、「学生同士でグループワークや議論がスムーズにできる」「教員とのコミュニケーションがスムーズにできる」の項目では評価が著しく低いことが確認される。この2項目については、教員の回答でも同様の傾向が見られ、オンライン授業の弱点と言えるだろう。これは、科目別に見た「遠隔授業についての総合的な満足度」に関する学生の回答で、「学生同士でグループワークや議論」を前提とする演習科目や実技科目において満足度が低いこととも関係がありそうである（図2参照）。

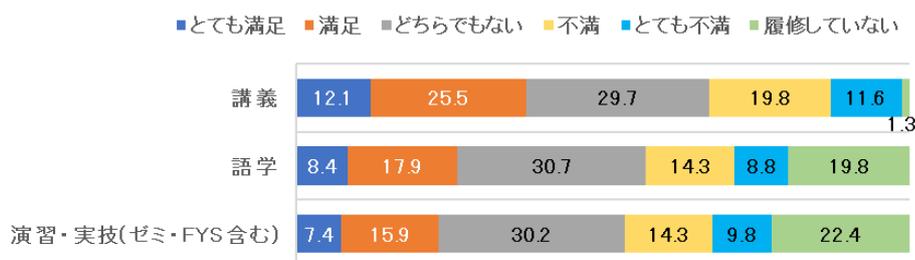


図2 遠隔授業に対する学生の総合的満足度（回答数 3,900 人）

図2の神奈川大学の調査では、講義に比べて語学科目もオンラインの満足度は低くなっている。しかし、語学科目もやり方次第では、**オンラインの長所を活かして満足度を高めることができることを、吹原先生の事例が示している。「学修を継続させるためには、最初から『できない』と思わせない」「ネット授業であっても楽しく学べると思ってもらうことが最も重要」といった、吹原先生と高橋先生の学生に対する思いやりが教育の原点であり、対面授業であろうとオンラインであろうと、教育効果をあげる工夫につながる**ことが改めて認識された。この一方で、準備のために多大の時間と労力が割かれていることも忘れてはならないだろう。

神奈川大学のアンケート調査で満足度が低かった演習科目についてであるが、私もフィールドワークゼミナールを担当している。地域に出て、社会人や学生同士で議論しながら、企画案を練り上げ、実践していくフィールドワークにとっては、遠隔授業は致命的であった。結局、座学を中心に、ビジネスアイデアコンテストに絡めて学生が考えた企画案に対して私がコメントを付すというプロセスを数回繰り返すことで、企画案をブラッシュアップするとともに、ゼミナールの目標である「マーケティング思考」を徹底的に身につけるよう、マナバのレポート機能を使って個別指導をするぐらいであった。

ただ、これまではグループで議論することを優先したため、自分の意見や企画案を持たず、他の学生の意見に同調する学生も少なからずいた。個別指導を徹底することで、自分の意見を持つようになり、これまで以上にマーケティング思考が身についたことは間違いない。そのうえでのグループ学習が後期からようやく可能になったが、例年よりも活発な議論が展開されており、前期の準備期間が決して無駄ではなかったと感じている。

しかし、私と同じくフィールドワークゼミナールを担当されている宍戸先生や OBP コースを担当されている林先生は、Zoom や Web 会議を駆使することで、学生同士の話し合いは前期でも可能となっていた。アナログ人間の私にとっては、それらをゼミナールで活用するにはハードルが高すぎ、あきらめていたというのが正直なところである。できればグループワークをもっと早く導入した方が良かったのではないかという反省をしていたところ、(ニューズレター原稿の校正段階で) **西嶋先生のマナバのプロジェクト機能を活用したグループワークの導入**を知り、通常の授業で可能ならばと思い直し、早速導入することにした。すでに学生とは顔見知りであり、対面の授業で議論しつつも、短縮された授業時間を補い、議論を「見える化」することを目標としている。

議論をどのように活発化させていくかは、**西嶋先生がされた工夫**を参考にしながらも、手探りで進めていくしかない。先を進まれる宍戸先生は、Zoom ミーティングは「**車座になり机を囲んで1つのものを作り上げていくグループワーク**、という点では難しい側面があるようだ」と言われる。果たしてどのようなやり方が望ましいのか、今回取り上げられた事例以外にも、多くの先生方がいろいろな取り組みをされ、新しい知見を蓄積されているにちがいない。

林先生が言われるように、民間企業では一般的となりつつある Web 会議のノウハウなどを教員も学ぶべきである、というご意見はもっともである。社会の変化や ICT の進歩に応じて、大学の授業形態も伝統的な対面授業だけでなく、オンラインの多様な形態を併用するハイブリッド型にならざるを得ないであろう。他の先生方との知見やノウハウの共有を促進し、支える仕組みを考えるうえで、FD 委員会の役割は今後いっそう重要になると思われる。

* これはウェブ上 (https://www.kanagawa-u.ac.jp/news/details_20645.html) で公開されている。

文中で用いた図1と図2は、この調査結果をもとに筆者が作成した。



編集後記

杉田 陽出

(経済学部 経済学科 准教授)

後期の対面授業が始まり、すでに4週目の授業を終えた(2020年10月22日現在)。隣の人とは距離を取って座り、極力話さないなど、授業中の学生にはある程度の行動制限が設けられており、正直言って、対話型の演習授業を行うのに不便を感じることもある。しかし、学生の顔を見ながら授業を行えるのは、教員にとってやはり嬉しいことである。

このように感慨をもって始まった対面授業であるが、筆者が行っていた以前の対面授業とは変化した点がある。その変化とは、授業運営方法の一環として、前期のオンライン授業で用いたマナバを併用するようになったことである。オンライン授業で得た知識や経験を後期の対面授業でも活用している教員の数は、本学でも増加しているのではないだろうか。

ただ、その活用方法については、個人で抱え込んでしまうのではなく、他の教員と共有し、お互いに新しい知識や知見を得ることで、さらなる向上が望めると考えられる。そのためのツールの1つとして発刊されたのが、今回のFDニューズレター増刊号である。ここで報告されている本学6名の先生方のオンライン授業での様々な取り組みは、我々教員がこれからの授業運営のあり方を考えるうえで大変示唆に富んでいる。より多くの教員の方々に読んでいただき、参考にさせていただければと思う。

この場をお借りして、今回の増刊号作成にご協力いただいた柴田孝先生、西嶋淳先生、吹原顕子先生、高橋美貴先生、宍戸邦章先生、林幸治先生に感謝申し上げます。後期が始まったばかりで常にも増してご多忙であるにもかかわらず、原稿執筆をお引き受けくださいましたことに加えて、原稿校正に関する筆者の問い合わせにも丁寧に対応してくださり、ありがとうございました。

また、FDニューズレターワーキングのメンバーであり、大変充実した内容の「結びにかえて」を書いてくださった加藤司先生と、原稿の校正作業ではいつも適切なアドバイスをしてくださった尾場友和先生(公共学部 公共学科 准教授)にも、心よりお礼申し上げます。



大阪商業大学 FDニューズレター 第21号

発行日：2020年11月1日

発行：大阪商業大学FD委員会

〒577-8505 東大阪市御厨栄町4-1-10

Tel 06-6781-8816 Fax 06-6781-6156